

人間中心情報システム化を阻む非倫理的バリエー

Non ethical barrier to construct human oriented information system

松平和也[†]

Kazuya Matsudaira[†]

[†]株式会社プライド

[†] Praid, Founder

要旨

日本社会には、目に見えないバリエーがいたるところに張り巡らされてある。この障碍に阻まれて社会の弱者は、区別され差別され、侮辱され、虐げられている。弱者は、死に至ることもある。小中高生のいじめ自殺や老老介護殺人などの例がそれである。この現実を考慮せずに、情報システム化を進めても、まったく意味の無いシステムが生まれるだけであり、問題解決に至らない。バリエーは他者を知ることを、直接的間接的に邪魔をしているのである。生きている他者に優しく振舞えるということは、その他者を良く知ることから始まる。本論では、破倫的社会に横たわる、無慈悲な現実制度の改革を図り、倫理的な情報システムを確立するための人間中心アプローチの必要性を訴える。

1. 社会に張り巡らされた弱者排除の障碍

ethical barrier とでもというか、一見倫理的に見えるが、弱者にとっては、きわめて困難な目に見えない障壁が社会には存在する。筆者は、50年前になるが、就職の際に、某著名銀行への、入社試験さえ受けられないという経験をした。教授推薦をいただいて訪問した銀行である。教授推薦書、成績証明書、卒業見込証明書、そして履歴書など一式をそろえて提出した。面接当日、銀行の人事部長氏は、履歴書のみを開いて、一言『仕事上信用第一だから、“ててなし児”は、採用しないのでー』と冷ややかに言われたのである。それまで、片親であることのハンディなど感じたこともなく生きてきたのにである。もちろん、その銀行の会社案内には、父親のいない、すなわち片親の子は悪さをするとということで採用しないと書いていない。冷たく拒絶された大学4年生の春休み、大銀行の聳え立つビルを出て、人事部長氏から言われた言葉を反芻しながら、返却された書類を握り締めて、“俺を採用しないと損だぞ”と、自分を知らうともしない銀行を後にした。

社会には、目に見えない障壁があるものだと社会の一端に身をおく時になってやっと知り、誰でも公平に就業できる社会習慣が普通でなければならぬし、バリエーのない社会を作っていきたいな一とそのとき痛切に思ったものである。実際、倫理的障壁は、いたるところにその網を張り巡らされていたのである。大企業への就職をあきらめて、自立する道に入り、またもや高い障壁にぶちあたった。新事務所開設の資金の調達で、敷金権利金家賃の前払いと2千万円ぐらいの資金需要が生じた。そこで、あの時の銀行の支店の貸付係に資金貸し付けを申し込んだ。そして貸付課長に面会したところ、担保を要求された。そんな資産を持ち合わせていない20歳台の事業家を自認する筆者は、大企業と取り交わしたコンサルティング契約書の写しを見せて、これからのキャッシュフローを懸命に説明したのである。にもかかわらず、その書類を一顧だにせず、貸付課長は、担保がなければ貸せませんと冷たく言うのみであった。結局、知人親族役員から金をかき集めて、大家さんに家賃の前払いを行い入居を許していただき、月々のコンサルティング収入から繰り延べ払いで敷金権利金を半年で払い終わった。以来、事業の上で、銀行から金を借りたことはなかった。結果的に、幸い歩積両建てなんていう貸付の規則も知らないままであった。今では、私が強くなるために、成長に寄与するバリエーなら、社会に存在する意義はあるのかもしれないと前向きに理解する心の余裕が持ててはいる。

2. 森鷗外に見るバリエーに囲まれた非倫理的人生

明治の文豪、森鷗外は、袴をはいたまま死んだという志田信夫氏[1]の説がある。鷗外は、死ぬ間際ま

で、爵位授与の通知を待ち続けたのだそうである。しかし、遺言は『石見人、森林太郎として死ぬとだけ墓に記してくれ』というのであった。明治の偉大な小説家、軍医総監、医学博士、文学博士など、肩書きに不足はない鷗外であったが、先輩の軍医総監皆が授与された爵位だけはなかった。鷗外は、津和野藩御典医の森家の婿養子の長男に生まれて、母の期待を一身に集めて育った。11歳にて、年を偽り東大医学部予科に入学した。19歳にて卒業し軍医となった。それから、森家の家長として、家や国の重圧と戦い抜いた。ドイツ留学時の恋では、恋人エリスが日本まで追ってきたのに、森家はエリスを追い返してしまい、鷗外は会うこともなかった。さらに、時の海軍の要人赤松中将の娘と結婚しておきながら、不美人だからと母親が追い出してしまった。長州閥に入れない鷗外は、時の権力者山県有朋に擦り寄り、懸命の努力の末に、軍医総監にまで昇進する。

軍医総監時代のとき、『最後の一句』という小説を書いた。内容は、死罪と決まった罪人の娘や息子が、父親の身代わりになりたいと願い出た史実である。大阪西町奉行所奉行は、取調べのために子供に質問した。その最後の問いに答えた娘の最後の一句、“お上の事には間違いがございませんまいから”というのである。一般に、この言葉は官吏森林太郎の心のうちを表明したと理解されている。医学者として、東大の権威を背景に、脚気細菌説に組してしまい、軍医総監にまで上り詰めた鷗外は、不名誉な敗北を喫してしまった。森鷗外は、お上のすることに間違いがないと、男爵受爵を夢に見て、袴をはいて待ち続けたのである。貴族社会から区別された鷗外の一生は、とても倫理的な一生だったとはいえない。森家を大事に思う母親の懐に抱かれた一生であった。ただ、お墓を見れば、本人の真の願いは後世の人に理解されたのかもしれない。

3. 夏目漱石にみる倫理的人生

もう一人の明治の文豪、夏目漱石には、文部省からの文学博士号拒否事件がある。修善寺での大咯血の後、東京の病院での療養中のことである。留守宅に、文部省からの通知で、翌日に学位を授与するから、出頭するようにとのことであった。漱石は、直ちに学位辞退の連絡をしたが、翌日学位記が届いてしまった。文部省の学位令には、辞退の決まりがないと国は言い張る。結局、うやむやになったのだが、新聞紙上にこの事件は報知され、国民的話題になった。漱石自身は、今まで、ただの夏目何がしと生きてきたので、今後もそうありたいと願っただけであると手紙などに記している。学問や文芸への国家の介入は、その墮落であるとする、漱石の反権威主義はさすがである。このいきさつを事件として、観察していた京都帝大助教授西田幾多郎は、“近頃の快事は、夏目さんの文学博士辞退である”と親しい友人に手紙を出している。そして、西田はこの事件が起きた同じ年に、有名な『善の研究』という倫理書を出版している。漱石の英語の恩師、マードック先生からは、突然漱石に手紙が届き、“博士号辞退の件は、君がモラル・バックボーンを有している証拠でめでたい”と文中にあったのである。旧師は、さらに英国での事例として、グラッドストーンやスペンサーという人の先例を示唆してくれたのである。

夏目漱石は、生まれた翌年明治元年に養子に出された。養父塩原は、その子を長男として入籍する。数年後には養父母は離婚する。9歳のときに夏目家に戻される。復籍は21歳のときになる。徴兵回避のため、本籍を北海道に移す。このころから神経衰弱に悩む。妻鏡子のヒステリー悪化、自殺未遂事件などに悩む。33歳のときロンドン留学、二年間の苦学時代を外地で過ごす。40歳で朝日新聞社入社。自身の神経衰弱悪化もあり、鏡子と子供達が妻の実家に戻る。小説家になると、元の養父が金の無心に来る。胃潰瘍で入院退院を繰り返す。50歳になる前に死去。近代日本のもっとも聡明な自由人夏目漱石は、独立不羈の人、幼い子供をやったりとったり、兵隊に行けと強制したり、博士号をやるぞといわれたり、国家の囲い込みバリエーションなどを決して安易に受け入れることなく生きたのである。

4. 現代の政治家に見る『ペディアクラシー』と『しがらみ政治』

安倍首相の母親は、森鷗外の母を想起させる。わが子がせっかく得た上位階層を滑り落ちないように、必死に息子に尽くしてきたのである。結果的に総理大臣を2度もやらせ、それを務めるわが子を守り続けている。学歴は超一流ではないが、成蹊学園一途に大学教育を終えさせ、米国留学で箔をつけさせた。そして世間を知るべく神戸製鋼所に入社させた。当社は、今検査データ改ざん問題で存続が問われている。過去20年間を振り返っても、政治資金規正法違反や総会屋事件など枚挙にいとまない不祥事会社という企業体質の中でぬくぬくと社会の甘さを体得したのではないかと疑われてしまう。そして念願の政界にすい！と入れた。父親の財産を継いで政治資金をたっぷりと無税で承継し、母親の願い通りに(?)総理大臣へと上り詰め加計・森友問題を惹起した。安倍内閣を形成する重鎮たちも、たとえば、麻生副総理をはじめとして、その取り巻きはほとんどが政治家家系の繭の中に守られて、今の階層に上り詰めた方々ばかりである。もちろん、そのような方々の父母、祖父祖母が、自分の子孫に尽くすことは非倫理的であるというのではない。この階層に入ろうとする下層のものから、バリエーションを張って、排除することが非倫理的であるというのである。このようなぬくぬくとした環境を維持しようとするのを、“ペディアクラシー”という。間違いなく政界の中核には、目に見えないバリエーションが築かれているのである。子供のころから母親に溺愛されて保護されて育った男女政治家たちが、国家の税金を、潤沢に使って国会をのし歩いている。そして、選挙活動にいそしむ総理への野次、総理を辞めろーとやじる人々を見下した行動をとるのである。李下に冠を正さず、と言いながら、腹心の友をかばい、官僚の付度を誘導してあるべき行政の姿をひん曲げる。自分を例外と断ずる傲慢な政治家が日本をリードする。このような政治を、しがらみ政治と言うらしい。利権を柵『しがらみ』にからみつかせて、甘い汁を吸うのである。しかし、大阪、名古屋などから東上してきた、しがらみ政治打破の風は、いよいよ東京都に吹き始めた。都民目線にさらされた東京都の政治家はおたおたしている。国民目線の鋭い視線が、しがらみを見抜かねばならない。いたるところに張り巡らした、しがらみに自民党の金権基盤が張り付いているので、これを引っ剥がせず政治改革は口だけで、政治の情報システム化が寸進もしない。

5. 生活における文化的規範

政治家が通う田村町の値の張るステーキハウス、レストランには、予約を取れないのがある。このようなレストランで食事したい場合、私ならある一流会社の秘書さんに頼み、会社から予約を取っていただく。この場合、予約に使う電話番号が文化的記号なのである。高級料亭では、受信した電話番号を確認して予約を受け入れるのである。特定な人間に、ある記号をつけて区別するという、文化的規範が存在する。そして、記号がついてない場合、あるコミュニティから排除したり、屈辱をあたえるのである。筆者の経験では、霞ヶ関CCでの体験である。一代限りの会員権を募集したので、2人の会員の推薦書とともに、書類を提出したら『書類選考の結果落選』という通知が来たのである。10文字に満たない文書の通知である。そのときソフトバンクの孫正義氏が合格した。私には、この時使われた文化的記号は、資産の桁数であったとしか思えない。文化的規範となる、目に見えないように張り巡らされた防御網で異分子の侵入を阻むのである。もし、間違っただけで入会すると、お前は歓迎されていない！お前には記号がついていないと、耳にささやかれるのである。京都には、“いちげんさんお断り”という商売の方法がある。お得意さんしか客にしないというのであるから、旅行客ではまず入店できない。花街や老舗でいくら金をちらつかせても、京都では客になれないのである。古都、京都には、城郭は無いがまことに侵入しにくい壁がある。京都はよそ者を寄せ付けない、という批判があるが、2千年の文化的規範なのである。とにかく、京都では長居は禁物である。ぶぶ漬けでもいかがと言われかねないのである[2]。

6. エチケットとマナー

エチケットが礼儀作法で、子供のころの躰により身につくと言われている。初対面の人にきちんとご挨拶をするなどはエチケットであろう。一方、マナーは行儀作法で、その場の習慣化されたやり方で、場にふさわしい態度を言うでしょう。洋食でナイフとフォークの使い方、ナプキンの扱い方などはテーブルマナーといって、体験的には高校生ぐらいから教えてもらった。これらエチケットやマナーに失敗すると、陰で血は争えないとか、育ちが良い悪いと烙印を捺される。筆者も、“ててなしご”に育ったゆえに、いろいろ言われて差別区別の連続だった。ではあるが、ゴルフ場に行きプレイしてみて、お育ちの良い方々が？をつけたくなるような言動『スコア誤記など』に出くわして、かえってホッとしたのである。ただ、ゴルフで一番嫌だったのは、接待相手の部長氏がガールフレンドを同伴し前泊して行くゴルフであった。

わざわざ倫理という言葉を持ち出す領域ではないかもしれないが、子供や大人になりきれない未成年者に、なぜエチケットやマナーに反するのかを、言葉や文章で根気良く説明し理解させるには、倫理を説く人の人徳が必須であろう。ただ、最近では、込み合った電車の中で、朝ごはんを食す女性がいるのにはびっくり。筆者は、定期的に慶応病院に朝飯抜きで行くが、そのようなときに押されてやっと立っている後期高齢者の目の下で、おいしそうなサンドイッチをぱくついている女性を定期的に見るのである。自分のお腹が、グーグーと鳴って恥ずかしかった。やがて彼女はサンドイッチを食べ終わると、コンビニにて買ったばかりのコーヒーを袋から取り出して飲み始める。香りがプーンとあがってきて、だんだん腹が立ってくるのである。でもこれは、エチケットもマナーも失われた押し合いへしあいの空間だから許されるのか？倫理を空気にまぶして呼吸する方法がないものなのだろうか？

7. 職場での順法

職場には、自分の能力に自信がない人、劣等感を持つ人、日々不安で落ち着いて仕事に取り組めない人、健康に一抹の不安があり、仕事を完遂する気力がわいてこない人がうようよいる。この人たちが、敗北感を持ったり、疎外感を持つと倫理的問題が湧出して来る。昇格もしなくなり、上司の評価は悪くなる。結果、入社拒否、無断欠勤、職場放棄などになり、ひどいときは、自殺者が出る。こうなると、部門外から見ても、社外から見ても、会社はブラックと見られる。職場の弱者が、素直に状況を話せる環境を整えることが大事だし、本音を話せば、通常、対策が立てられる。人間は弱者であり続けたいとは思わない。立ち直る機会を与えれば、必ず職場の力になれるのである。倫理とは、職場の一員となる合言葉でもある。そのような雰囲気がない職場では、逸脱行為が見られるようになる。役割行為や慣習的行為からはずれると、職場の異分子と見られる。規範には、慣習というものがある。先にあげたときたりとかエチケット、マナーなどがこれに入る。そして、道徳は人間の生き方を語る場合、他者への迷惑のないようにと強調し、共生の論理を訴える。“よそ様にご迷惑になるから”と母親なら子供に口うるさくしつけたものである。法律には、規則とか制度のように処罰が伴わないような緩いものから、国民が遵守を義務づけられるものもある。法律には法学という親学問があり、倫理には倫理学という基盤学問が存在する。しかし、道徳には準拠する学問体系がない。アリストテレスの説では、大徳学という学問があるというが、これは平凡人には教えられる。道徳は、個々人の考え方により、解釈が違うことが多い。特に子供に盲目的に教えるのではなく、一人一人の判断基準を話させて、なぜそのような考え方が大事かを示すべきであろう。子供が自分の判断基準を示せば、それはそれで尊重されるべきである。自分の考え方を示せば、他者はどう考えるかを、知るべきであるとおもうであろう。道徳は押し付けるものではない。

8. スティグマとレッテル張り

Stigma, スティグマとは、ギリシャ語に由来する言葉である。烙印を捺すなどという意味で、特定の人々を特別に区分する身体につけられた印であるとされる。

レッテルを貼る、などとも言うが、人間を偏見で認識したり、差別して不利益を与える場合に使うことが多い。チッソの水俣病患者は、二重三重にレッテルを貼られた。国の衛生部会も、市の行政当局も、水俣病に犯された零細漁民にスティグマを捺印した。医学会の権威機構である東京大学も地元熊本大学の意見を認めず、流行病とか栄養失調と決め付けた。明治時代の脚気論争の反省もなくである。この場合、同情も差別もなくして、この水銀の垂れ流しを止め、患者への科学的治療と国の補償に舵を切るべきであったのである[3]。小中高の学校での、頻発するいじめ自殺では、いじめ対象者としてスティグマを烙印された子供は、自殺に至るまで心の平安が得られない。一方で、官僚主義的教育者たちは、学校クラスや課程にアンケートを取ったと言う『言い訳』の準備をして対策を打たない。アンケートというのは、形式に過ぎない安易な方法であることは小学生でも知っている。ここにも、小中学生の心を覗き込まない教育委員会の張り巡らしたバリエーが存在する。これを突破しない不心得教育者がぬくぬくしている。高齢者の世界では、収入も細くなり、介護者も高齢になり、生活の不安が日々つのるなかで、お前は生きていく価値が無いと耳元に囁かれて、孤立死したり、自殺においこまれたり、介護者の殺人にまで発展してしまう。社会は、弱者に一方的にレッテルを貼り、区別し、抹殺してしまう。

9. まとめ

人間中心の情報システムの設計には、非倫理的バリエーの破壊から入るべきである。そうでないと、バリエーを残したまま、社会構造をそのままにシステム設計すると、人間はその目に見えないバリエーに阻まれて阻害され差別されて、人間として普通に扱われないのである。人間は攻撃性を除去できないゆえに、他人を区別したり排除すると、自己の優越性を感じず。社会に目に見えない形で張り巡らされている、バリエーの認識、分析から入らないと人間中心の情報システムが機能しない。破倫につながる非倫理的バリエーを発見し、破壊することこそ情報システム成功の道なのである。そのためのコンセプトは、システム系に存在する人間を利害関係者と認識するのである。AI支援により関係者のプロファイリング機能を強化し、関係者を良く知るための機能を、入力データ、出力情報に付与する。そうすることでお互いを良く知る人間同士がその系の中で意思決定し、行動をとる。世界市民的道徳観を保持した関係者が他者に対する愛や慈悲がたっぷり盛込まれた情報を意思決定に生かすことが成功の道である。

結果、行動は倫理的になる、人間は救われる[4]。

参考文献

- [1] 志田信男, 鷗外は何故袴をはいて死んだのか, 公人の友社, 2009.
- [2] 養老孟司, 京都の壁, PHP 研究所, 2017.
- [3] 友枝敏雄, 竹沢尚一郎, 正村俊之, 坂本佳鶴恵, 社会学のエッセンス, 有斐閣アルマ, 2017.
- [4] 柄谷行人, 倫理 21, 平凡社, 2013.